

# 戦間期「ドイツ新聞学」における J・ゲレス受容

## —新聞学の祖 K・デスターの場合—

須 藤 秀 平<sup>i</sup>

### はじめに——本稿の目的と成立の経緯

本稿は、おもに第一次世界大戦後の1920年代に興隆した「ドイツ新聞学」と呼ばれる学問領域において、その約一世紀前にあたる18世紀末から19世紀初頭に活躍したジャーナリスト、ヨーゼフ・ゲレス (Joseph Görres 1776-1848) の著作がどのように受容されたかを探ることを目的としたものである。

本研究の遂行に際しては、福岡大学研究推進部領域別研究チーム予算 (チーム名: 独仏比較文化研究) の助成を受けており、本稿はその成果報告書を兼ねている。そのため、まずは本論に先立って、該当年度である平成31年4月1日から令和4年3月31日までの研究成果の概要をここで記しておきたい。研究の目的としたのは、ゲレスが1798年に創刊した『赤新聞 (Das rothe Blatt)』をおもな対象とし、当時のドイツ語圏における「公共圏 (Öffentlichkeit)」イメージを考察することであった。実際に研究を進める中で、ゲレスがそのジャーナリズム活動において「真実 (Wahrheit)」の概念をどのように捉えていたかという問題が浮上し、その比較対象として、同時代の啓蒙主義者たちの言説の調査もおこなった。これらの成果として発表されたのが、「公共圏の再構成——ゲレス『赤新聞』(1798)における「公開性」概念の歴史的文脈」(日本独文学会西日本支部『西日本ドイツ文学』第33号、2021年、1-15頁)および「真理に惑う啓蒙主義——ベルリン水曜会における「真実/真理」言説の差異」(福岡大学研究推進部『福岡大学人文論叢』第53巻第3号、2021年、791-809頁)の二本の論文である。ここからさらに発展的な課題として設定されたのが、ジャーナリズムの諸類型の区別、例えば何らかの政治的信条にもとづく〈教導〉を目的とする政論新聞と、客観的事実の〈報道〉のみを目的とする報道新聞といった類型の区別が、18世紀末の新聞雑誌において確認されるかどうかを明らかにすることであった。同時に、その中でゲレスのジャーナリズムがどのように位置付けられ、意義付けうるのかを定めることが次なる目標となった。

この課題の遂行のためにゲレスに関する先行研究を調査する中で、ゲレスが1920年代に盛んに研究対象として

扱われており、いくつかの論文において彼のジャーナリズム的著作の綿密な分析がおこなわれていたことが判明した。こうした研究の興隆を支えたのが、戦間期ドイツで新たに制度化された「新聞学 (Zeitungswissenschaft)」という学問分野だったのである。それらの論文は、現在からおよそ100年前に書かれたものではあるが、ゲレス研究全般において詳細なテキスト分析に乏しい中で、いまだ先行研究として十分な価値を持つ。また、1920年代という特殊な時代、すなわちナチ党による政権掌握前夜であり、かつドイツ国内外でマス・メディアを通じて可視化される世論に対する関心が高まっていた時代の研究として、<sup>ii</sup>ゲレス受容史の重要な局面の一つとなるものでもある。

この新聞学について資料収集を進めた結果、筆者が特に注目に値すると判断したのは、カール・デスター (Karl d'Ester 1881-1960)、ハンス・アマンドゥス・ミュンスター (Hans Amandus Münster 1901-1963)、ヴィルヘルム・シュパエル (Wilhelm Spael 1894-1966) の三名である。彼らはいずれも初期の新聞学研究に従事し、1920年代後半にゲレスに関する個別論文を遺したという点で共通しているが、研究上の方法や立場、さらにはナチ政権への貢献度において異なっていた。本来であれば、各論者とそのテキストについて十分に理解した上でそれらを比較考察することで初めて実りある研究となろう。しかし、このときすでに研究チームの最終年度を迎えていたため、今回はやむなく対象をデスターに絞り、その特徴と意義についてまとめることで、今後の研究の足固めをすることとした。その基礎研究の成果を以下に報告する。

### 1. ドイツ新聞学の制度化とデスター

ドイツにおける「新聞学 (Zeitungswissenschaft)」とは、第一次世界大戦の前後に登場し、戦間期の1920年代に制度化され始めた学問分野である。新聞雑誌といった活字メディアを中心的な対象とし、一方ではジャーナリスト教育のための学問的基礎付けを目的としながら、他方では市場における情報伝達の実態に関する統計的調査

などにも取り組んだこの新たな学問は、今日の「メディア研究（英：media studies、独：Medienforschung）」に代表される「コミュニケーション学（英：communication studies、独：Kommunikationswissenschaft）」の前身となるものである。

しかしながら、ナチ体制下で国策科学として講座化されたという過去から、その存在について学説史では長い間ほとんど黙殺ないし意図的に忘却されてきた。戦後ドイツでは、ナチ時代の遺産を払拭するために、当時すでに発展していたコミュニケーション学を、戦前から連続したのではなくアメリカからの「輸入学問」であると標榜することによって正当化しようとする風潮があったのである。このことについて、日本におけるメディア史研究の第一人者である佐藤卓己は、アメリカ産という「商標偽装」ならびにナチ遺産の「密輸」と呼んで批判的に論じている。<sup>iii</sup> 佐藤によれば、新聞学として生じた学問分野が1930年代に「公示学（Publizistik）」と名称を変え発展したことの意味を正面から論究しようとする動きが現れてきたのは1980年代以降であり、<sup>iv</sup> そうした議論がドイツの学会で正式に取り上げられるようになるには、さらに21世紀を待たなければならなかった。<sup>v</sup>

近年では、コミュニケーション学の鼻祖としてのドイツ新聞学に関する研究は急速に発展し、専門の事典としてM・メイエン、T・ヴィーデマン編『コミュニケーション学伝記事典』<sup>vi</sup> が編纂されるに至っている。これにもとづき、まずは新聞学の概要について、その成立事情とあわせて簡単にまとめておきたい。

ドイツ新聞学は先述のように、20世紀初頭に新しい学問として登場した。ドイツ語圏の大学における「新聞誌（Zeitungskunde）」に関する講義は18世紀にも見られ、19世紀末の世紀転換期には個別のゼミナールが開かれた例も確認されているが、この時点ではまだ一つの学問分野を確立するには至らなかった。制度化への道を開いたのは国民経済学者カール・ビューヒャー（Karl Bücher 1847-1930）である。ビューヒャーは1884年の時点でパーゼル大学の国家学教授として新聞に関する講義をおこなっていたが、1916年にライプツィヒ大学を定年退官したのち、同地に新聞学に関するドイツ初の研究機関である「新聞誌研究所（Institut für Zeitungskunde）」を創設した。この研究所設置の背景には、新聞社協会やジャーナリスト団体との利害関係があったとされる。すなわち、一方では当時のドイツ社会で低い社会的地位に甘んじていたジャーナリストが自らの社会的威信の向上を図るために資金援助を通じてアカデミズムの権威との結合を望み、他方では新興学科である新聞学の側が新聞業界と結託することで自らの社会的必要性を強調しようとしたのである。こうして国庫財政ではなく新聞業界の利害を反映した資金によって、新聞学に関する最初の組織化が果たされた。<sup>vii</sup>

以降、これに続くようにして「新聞誌（Zeitungskunde）」「新聞学（Zeitungswissenschaft）」「新聞研究（Zeitungsforschung）」の名を冠した研究所が全国で次々に設置され、1935年までに11を数えるまでになった。設立年、設立地および代表者を挙げると次のようになる。

1916年	ライプツィヒ（Karl Bücher）
1919年	ミュンスター（Aloys Meister）
1920年	ケルン（Martin Spahn）
1922年	フライブルク（Wilhelm Kapp）
1923年	ニュルンベルク（Leo Benario）
1924年	ミュンヘン（Karl d'Ester）
	ベルリン（Martin Mohr、1928年より Emil Dovifat）
1926年	ドルトムント（Erich Schulz）
	ハレ（Max Fleischmann）
1927年	ハイデルベルク（Wilhelm Waldkirch）
1935年	ケーニヒスベルク（Franz Alfred Six）

本稿で取り上げるK・デスターは、1924年にミュンヘン大学に新しく設置された新聞学の教授職に員外教授として就任した上で同大学の「新聞学研究所（Institut für Zeitungswissenschaft）」所長となり、同職をその後30年に渡って務めた。<sup>viii</sup> なお、デスターの大学教授資格審査（1919年）に携わったのは、ミュンスター大学における新聞学研究所の初代所長アロイス・マイスターである。その他、上記の表に挙げた中で本研究に関わりの深い人物を取り上げると、ケルン大学のマルティン・シュパーン（Martin Spahn）は自らもゲレス研究に従事したのみならず、<sup>ix</sup> 1927年5月28日にヴィルヘルム・シュパエルの博士学位論文「プブリツィスティクとジュールナリスティック、およびヨーゼフ・ゲレスにおけるその現象形態（1798-1814）——公示学の方法論確立のために」の審査と、その後の著書出版の編集に携わっている。<sup>x</sup>

これらの研究所の設置と並んで、新聞学に関する学会もまた制度化されたが、ここにもデスターが大きく貢献している。1925年、デスターは「新聞史・公示学学会」の設立を呼びかけ、翌1926年にはハノーファー工科大学講師で友人でもあったヴァルター・ハイデとともに雑誌『新聞学』を創刊した。その後、実際に1928年に「新聞学会」が創設されると、この『新聞学』は各大学の研究所報を兼ねる機関誌となった。<sup>xi</sup> この頃にはデスターは「最も有名なドイツ新聞学者」として国外にも名を轟かせ、国際的な学会活動も担ったとされる。

ナチ党の政権獲得後にも、デスターは依然として最も力のある新聞学者の一人であった。1934年1月1日付で刊行された『新聞学』にはデスターの論文が巻頭論文として掲載されたが、同号には「ジャーナリスト養成教育のための新聞学課程の国家認定」との見出しの告知文も

掲載されており、宣伝大臣ゲッベルスが発効した「ドイツ記者法」の規定によりドイツの各大学で新聞学が講座化されたことが伝えられ、それに対する謝辞が述べられている。<sup>xii</sup> デスターは自分自身が反ナチの立場を取っていたことを戦後に主張しているが、上記の事実からも新聞学の発展がナチズムの政策に支えられていたことは明白である。なお、終戦に際しデスターは1945年にアメリカ軍政府により一度罷免されているが、1947年9月に再雇用され、1952年に定年退官を迎えている。

こうして20世紀前半にナチズムとも関わりを持ちながら大きく発展した新聞学だが、やはり若い学問ということもあり、当初より様々な問題を抱えてもいた。そのうち最も根深いものの一つに、ディシプリンすなわち学問的規律の曖昧さという問題がある。新聞学は新たな学問を名乗りながら、確固とした原理原則や統一的な方法論を欠いていたのである。先にも触れたように、学問の名称自体、「新聞誌 (Zeitungskunde)」「新聞学 (Zeitungswissenschaft)」「新聞研究 (Zeitungsforschung)」、あるいはさらに「公示学 (Publizistik)」と不統一なものであった。先述の1934年『新聞学』に掲載されたデスターの巻頭論文の表題は「新聞学とは何か? ——政治教育の要素としての新聞学」であったが、学会設立から5年以上が経過した時点で「新聞学とは何か」が議論されていること自体、そのディシプリンがいかに定まらないものであったかを示している。研究の方向性や内容においても足並みが揃っていないとは言い難く、個々の論文は研究者の、あるいはそれを支える機関の個別的な意図や主張を多分に反映していた。<sup>xiii</sup>

こうした不統一は、第一に新聞学が時局の要請にもとづいて急ごしらえで作りに上げられたという点に由来する。新聞学成立の背景にジャーナリストの社会的威信の向上を願う新聞業界の思惑があったことは先にも述べたが、それ以外の要因として、佐藤卓己は第一次世界大戦の「敗戦コンプレックス」を挙げている。新聞学に関する最初の研究所がライプツィヒに設置されたのは第一次世界大戦下の1916年であったが、このときすでにドイツには連合国の戦時プロパガンダに対する明白な劣勢という認識があったとされる。敗戦後には「前線では破れず、宣伝戦で破れたドイツ」という軍部の言い訳が、かえって各大学の新聞学研究所の設置を後押しするスローガンとなった。<sup>xiv</sup> こうして新聞学は、一方では敗戦の恥辱を払拭するという希望を一身に背負いつつ、他方では極度に実利的な社会的・政治的要請を汲み取った複合体として出発したのである。

あるいは、方法論の不一致自体は、新聞学というあり方そのものに内在する問題でもあった。もともと「歴史学と社会学の間」に成立した新聞学の内部では、その対象や方法を歴史研究や文芸研究に寄せるか、あるいは実地的調査や統計に寄せるかという点で立場が分かれてい

たのである。これは1930年代頃より「新聞学」から「公示学」へと移行する際に分かれ目ともなったが、<sup>xv</sup> その中でデスターはどちらかと言えば旧式の文学ないし歴史学的な側に属していた。

そんなデスターは新聞学の第一人者であったわけだが、その功績は研究においてというよりも、生涯をかけて新聞学の制度化に尽力したという点にもっぱら見出されるようである。『コミュニケーション学伝記事典』のデスターの項目では、彼が新聞学にとって理論や方法論の面で貢献したかどうかについては意見が分かれるとの見解が示されている。<sup>xvi</sup> デスター自身は、新聞学はまづもって基礎固めをする必要があり、理論的問題には、個々の対象を集め、歴史的な調査・研究を進めたのちによりやく取り組むことができるものと考えていた。新聞雑誌に関する歴史的資料の収集を本領とした歴史家らしい見方である。もっとも、これについても、集めた膨大な資料を彼自身が体系的に有効活用するには至らなかったとする手厳しい評価もある。<sup>xvii</sup>

制度化への尽力と並ぶデスターの新聞学への貢献として興味深いのは、ミュンヘン大学教授としての権限を最大限に用い、当該分野に関する博士学位授与者を大量に世に送り出したことである。『コミュニケーション学伝記事典』では、デスターが1960年までにおよそ400の博士号を授与したという、にわかには信じがたい数字が伝えられている。当然ながら、それだけの学位論文の中には質の面で疑わしいものも多数含まれており、大学内ではしばしば「博士号工場 (Doktorfabrik)」と揶揄されることとなった。<sup>xviii</sup> 同情的に見るならば、そこに新設学部教授の苦悩を看取することもできるだろう。いずれにせよ、新聞学の後継者となる人材を量産したという点で、彼はその興隆に確かに寄与したと言える。

## 2. ドイツ新聞学におけるゲレス受容——デスターを中心に

こうして、マス・メディアという新奇な現象を対象としたという点に尽きない様々な事情により、他学部からの新聞学の評判は決して芳くはなかったが、それでも新聞学は着実に発展し、業績を増やしていった。その中で本研究が注目したいのは、当時の新聞学者たちがこぞって一世紀も前の人物であるヨーゼフ・ゲレス (Joseph Görres 1776-1848)の研究に取り組んだという点である。ゲレスは18世紀末のフランス革命戦争や19世紀初頭のナポレオン戦争の時代に影響力の強い政治紙を発行し脚光を浴びた論争的なジャーナリストである。革命戦争の結果フランス軍の占領下に置かれた1790年代のラインラントで、ゲレスは初め親革命派の旗手として、その後占領軍に対する批判的世論の代弁者として、さらに19世紀になると「民衆本 (Volksbuch)」の研究を通じてドイツ

精神を抽出しようとするロマン主義者として幅広い活動に従事したのち、晩年にはカトリック保守主義者として歴史学・神学研究に携わった。

そんなゲレスの初期の政治ジャーナリズム活動が、1920年代には盛んに研究対象とされたのである。最新の伝記的研究に付された参考文献表には、ゲレスに関する先行研究が1920年代に出されたものだけで60点以上挙げられている。<sup>xix</sup> そのうちジャーナリズムに関するものは10点以上に上るが、それを直接のテーマとしていないものであっても著者が新聞学の重要人物であるという場合も少なくない。もっと言えば、これはあくまで参考文献として挙げられたものであり、当時実際に出版された著作物の総数は当然ながらそれよりもさらに多いはずである。

もっとも、こうした1920年代のゲレス・ルネサンスは新聞学の興隆にのみ起因するものではない。その背景には、1926年がゲレスの生誕150周年にあたるという事情も関係している。このときゲレスの生誕地コブレンツでは記念祝典が開催された他、各地でいくつもの記念論集の類が出版された。それらは現在筆者の手元にあるアカデミックな論文集だけで3冊を数え、<sup>xx</sup> 地方紙の特別号のようなものも含めると、その数は総計26点に及ぶ。<sup>xxi</sup>

それでも、新聞学の興隆はやはりゲレス研究の振興に大きく作用したと言える。現在においてもなお最大のゲレス著作集『ヨーゼフ・ゲレス選集』もまた1920年代に成立したが、この選集の代表的編者の一人がデスターだったのである。その編集作業は1925年よりケルンで開始され、1928年に第1巻が出版されたが、<sup>xxii</sup> デスターはこのときH・A・ミュンスターとともに、ゲレスの代名詞的な政治紙『ライニッシャー・メルクア』を扱った第6巻から第11巻までの編集に携わり、こちらも1928年に出版を果たしている。<sup>xxiii</sup>

このミュンスターは当時『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』の著者として有名なF・テニエスのもと、ゲレスにおける「世論 (öffentliche Meinung)」の研究により博士号を取得し、1925年7月にケルン大学新聞学研究所長M・シュパーンの仲介でフライブルク大学新聞学研究所長W・カップが開講する「公示学・新聞問題」講座の無給助手となったばかりの気鋭の若手研究者であった。<sup>xxiv</sup> のちに「ナチ新聞学の旗手」<sup>xxv</sup> として知られるミュンスターにとって、ゲレスへの取り組みはその研究者人生の開始点となったわけである。このことから、新聞学がゲレス研究を促進したというだけでなく、翻ってゲレスの存在が新聞学の興隆にとって重要な意味を持ったという側面を見出すこともできる。

このように当時の新聞学者らによるゲレス受容はどれも興味深いものであるが、先述の通り今回は対象をデスターに絞り、特にゲレス生誕150周年記念論集に彼が書いた論文を取り上げてみたい。デスターは1926-27年

に出版された上記の3本の記念論集のすべてに、それもいずれもゲレスとジャーナリズムをテーマとした論文を寄稿している。それらは総じて現代のジャーナリズムのあり方を批判的に捉えた上で、理想のジャーナリスト像としてゲレスを提示するというものである。現代の我々の目からすると、典拠が不明瞭、分析が不十分と思われる箇所も散見し、厳密な研究論文とは言い難い。またゲレスの功績を讃えようとして施された美辞麗句がいささか過剰であったり、あるべきジャーナリズムについての主張が結局のところ理想論ないし精神論に傾いていたりするきらいもある。とはいえそうした点も、ジャーナリストの教育という社会的要請に応えようとした初期の新聞学の実情を知るにあたってはむしろ貴重な資料となる。以下、各論文の特徴と意義について詳述する。

### (1) 「ゲレスにおけるジャーナリズムの使命」<sup>xxvi</sup>

これは1926年6月に「ゲレス協会 (Görres-Gesellschaft)」によりケルンで出版された『ゲレス記念論集』に掲載された論文である。当協会は1876年に学問の保護・育成を目的に創設され、現在も精力的に活動を続けるカトリック系の団体である。論集の目次に記載されたデスターの肩書は「ミュンヘン大学新聞誌 (Zeitungskunde) 研究所長、同研究所教授」となっており、「新聞学」ないし「新聞学研究所」という名称がいまだ広く認知されていないことを窺わせる。

当論文におけるデスターの意図は、同時代のジャーナリズムのあり方を批判し、それに対するジャーナリストの本来の使命を、ゲレスの言葉や活動を通じて示すことにある。論文の冒頭ではジャーナリストが「この時代の王」となったとされる1920年代の状況が取り上げられるが、デスターの評価は次のようなものである。すなわち、現代のジャーナリズムはメディア技術の発達により急激に力を増したが、<sup>xxvii</sup> 一方で「新聞雑誌の倫理」は「技術的完成とは決して足並みを揃えてはいない」<sup>xxviii</sup>。このとき「ほぼすべての国で、この世論に影響を及ぼす媒体のますますの濫用に対する新たな出版法を求める声が上がっている」とされるが、それに応じてたとえ「法が制定されても、内部から新たに生まれ変わることがなければ、この悪しき状態は良くならない」<sup>xxix</sup> というのがデスターの考えである。

こうした状況に対し、デスターはゲレスのジャーナリズムがいかに義務感や使命感にもとづくものであったかを強調することで、いわばジャーナリストの道徳教育を試みる。このときデスターが特に重視するのは、ゲレスが常に「より高次の力が任命した高貴な職務」に就いていると信じ、その「使命と義務を倫理的に捉えていた」<sup>xxx</sup> という点である。デスターの言う倫理とは、概ねゲレスにおける「無党派性 (Unparteilichkeit)」と「真実への愛 (Wahrheitsliebe)」に集約される。<sup>xxxi</sup> この二

つはゲレスの最大の信条であったとされ、そうであるがゆえに彼のジャーナリズムは論争的であっても常に「倫理的原則のもとに」あり、「敵対者にもその権利を認める」ような公平なものであったと述べられている。<sup>xxxii</sup> もっともデスターによれば、ゲレスは人々が「公的な生に参加し、対立する意見に賛成反対の意思を持つ」べきであるとし、その意味では「死せる無関心」よりは「党派対立」の方が望ましいとも考えていた。<sup>xxxiii</sup> しかし同時に彼は、政治的対立であれ宗教的対立であれ、そうした主義の対立を「個々の人間同士の間のものではない」<sup>xxxiv</sup> とみなし、私的な個人の生とは切り離して考えていたとされる。そしてそれゆえにこそ、ゲレスは「公開性 (Publizität)」の原理を何よりも重視し、それに対する無責任な言論として「匿名の隠れ蓑をまとった、術策を弄する戦い」<sup>xxxv</sup> を敵視したのである。こうした考え方やあり方は、むしろ21世紀現在のポスト・トゥルース的状况において一層必要とされるものであり、その意味でこのときデスターがゲレスを通じて示した理想像は、決して容易に無下にできるものではないだろう。

とはいえ、学術論文として評価するなら、このデスターの論には先に述べた通り不十分な点も少なくない。引用に際してその出典は明示されておらず、またゲレスの言葉を素朴に受け止めそのまま自説に援用している点で、それが批判的検証に開かれたものであるとは言い難い。もっともデスター自身、参照すべき「学術的研究」<sup>xxxvi</sup> としてH・A・ミュンスターの著書をわざわざ紹介しているところを見ると、自分の論文が十分に「学術的」ではないという自覚もあったのだろう。ちなみに、社会学的・実証的調査を得意としたミュンスターを意識してか、デスターもこの論文の中盤で、テキストの「内容の統計学的算出」としてゲレスの政治紙『ライニッシャー・メルクーア』(1814-16年)に掲載された記事の「欄の幅 (Spaltenbreite)」をセンチメートル単位で計測することを試みているが、<sup>xxxvii</sup> それにより何が明らかになったのかは全くもって不明である。それでも、当新聞に関する伝記的記述の部分は、歴史学的に見て示唆に富むものでもある。<sup>xxxviii</sup> デスターがゲレス選集の編者を務めるにあたり当新聞を扱った巻を担当したことは先に述べたが、その面目躍如と言えようか。

最終的には、「そのとき限りの日々の成功を手に入れたり、さらにはジャーナリズムを儲けるためのビジネスにしたりする」ような「現代のジャーナリズム」と、それを支える「今日の新聞の読者」<sup>xxxix</sup> が改めて批判され、それに対して現代にも通じる理想的ジャーナリスト像としてゲレスが再び称賛される形で論文は締めくくられる。

## (2) 「ジャーナリストとしてのJ・ゲレス」<sup>xl</sup>

こちらはゲレスの生誕地コブレンツにおける記念論集に掲載された論文である。当地でのゲレス生誕150周年

記念祝典を終え、改めてそのジャーナリズムの意義を現代に提示することを意図したもので、ゲレスの伝記的記述が中心となっている。ゲレスの生涯に関する記述を通じて同時代のジャーナリストに指針を示そうとする、いわゆる偉人の伝記といった趣である。

デスターはまず、ゲレスのジャーナリストとしての生涯を三段階に分けて説明する。すなわち、「ジャコバン派」としてのジャーナリズム活動を中心としたおよそ1800年までの初期と、一方では「ドイツ精神 (Deutschtum)」を表現するためにロマン主義の文芸雑誌に携わりながら、他方ではまた自ら創刊した政治紙『ライニッシャー・メルクーア』において「喧伝 (Pausaunenstöße[ ])」行為を繰り返した中期、そして「カトリック教会の諸権利の擁護者」として保守主義的活動を展開した後期の三段階である。<sup>xli</sup> 全体として、ゲレスが表明した理念や彼の同時代批判の言葉、また実際におこなった活動などを取り上げ、その意義についての解説を試みる、という形式をとっている。

ここでも最終的な主張はかなり精神論的なものである。デスターによれば、ゲレスにおいて最も評価すべきは、いかなる危険を前にしてもその意志を曲げない「勇氣」と「豪胆さ」、そして先の論文でも挙げられていた「無党派性」と「真実への愛」である。これらは「嘘偽りにまみれた世界」においては一層重要であり、それらによりゲレスは「あらゆる時代のジャーナリストに対して輝かしい模範を示した」<sup>xlii</sup> と結論づけられる。また、「一つずつの言葉の後ろには全き人間としてのゲレスがいる」とされ、そこには「今日ますます型にはめ込まれたものとなってきている現代の新聞雑誌においてしばしば失われている読者へのあたたかな愛情」<sup>xliii</sup> が見出されるとも述べられている。

とはいえ、こうした素朴な要求もまた、歴史的に見て意義深いと言えるところもある。デスターは、ゲレスが「コブレンツ愛国者による立法機関への上申書」なる文書の中で「世論はシステムチックな計画に従うことで、内部から腐敗する」<sup>xliii</sup> といった旨の主張を展開したと伝えている。このときゲレスは「活動力を備え共和主義を信奉し、恥ずべき体制に従わないようなものはすべてアナキストという党派的な言葉で表され追放される」<sup>xliii</sup> ような独裁的状况を批判したとされる。出典が明確にされていないこの記述の真偽はともかく、1920年代当時のジャーナリズムをめぐる状況を考えると、こうした主張をあえてすること自体が論争的意味を持った可能性がある。というのも——おそらく世論批判の流行の追い風を受けて、さらにはナチズムの台頭と足並みを揃える形で——1930年前後には、国家による出版の自由の制限を求める著作が少なからず出版されることとなるからである。<sup>xliii</sup> そうした風潮を批判するという意図がデスターにあったかどうかは定かではないが、その後ナチ

体制により一層の制度化が進められる新聞学の黎明期において看過できない事象の一つである。

### (3) 「ゲレスとジャーナリズム」<sup>xvii</sup>

ミュンヘンでの記念論集『ヨーゼフ・ゲレス、過去と現在』に掲載された論文。1926年秋に建立されたゲレス記念碑について話題にしながら、肝心のゲレスが世間一般に十分に知られていないことをいささか冗長とも取れる表現で嘆く。その上で、ゲレスを「公共性の擁護者」にして「国民 (Volk) の教育者」<sup>xviii</sup>、そして「出版に向けられたあらゆる暴力的措置に敵対する者」<sup>xix</sup>として世に知らしめようとしている。ここでもデスターはゲレスの功績を華々しく描き出そうとするが、出典は明示されておらず、主張の論拠に乏しい部分もある。「ドイツ初のジャーナリスト記念碑の定礎にあたり考えたこと」という副題が示すように、全体として厳密な学術論文というよりは論説やエッセイに近い。

しかしながら、先の論文「ジャーナリストとしてのJ・ゲレス」の場合と同様、出版の自由を同時代に対し強く要求している点は、歴史的に見て重要である。デスターは自分たちの時代を「歴史の進展の中でしばしば高価な宝物のように求められ争われてきた理性的な出版の自由という財産が、再び激しい議論を引き起こしている」<sup>1</sup>時代と捉え、それを保持する必要性を唱えている。ここではさらに国外の状況についても言及され、多くの欧米諸国では言論の自由がすでに失われているとの指摘がなされる。デスターは言う、「我々が今日目の当たりしているのは、ファッショ的独裁が敷かれた国々において前代未聞の暴力的措置により言論の自由が奪われる様子、ポリシェヴィキのロシアで新聞が一堂の占有物として管理される様子、イギリスやアメリカのように新聞雑誌が経済的・技術的に途方も無い力を持つようになったアングロサクソンの国々で、世論のトラスト化を狙った企てが、これまた別の形で発言の自由を脅かす様子である」<sup>ii</sup>と。当時の世界情勢に対しどのような見方や評価があったのかを示す興味深い証言の一つである。

こうした状況の中で、デスターはゲレスを、言論の自由を弾圧した独裁君主に対し果敢に戦いを挑んだジャーナリストとして最大限に評価する。デスターによれば、ゲレスは「出版の濫用」に対しても目配りを欠いてはいなかったが、その場合も「出版の行き過ぎに対するはるかに望ましい保安措置」として、検閲ではなく「編集者の自己教育」<sup>iii</sup>を求めた。加えて、「申し合わせと黙認により、世論が一元的なものとなること」<sup>iiii</sup>を危惧してもいた。これらのゲレスの考えを根拠とし、デスターは現代にも言論の自由を、それも可能な限り多様性を保障する形で実現されることを望むのである。そして結論として、「公的な生」のための「あらゆる党派性から隔たった」ジャーナリズムが現在のドイツにも必要であると説

く。

なお当論文においても、同時代のミュンスターの研究が「示唆に富む研究」として紹介されている。それは特に、ゲレスが「新聞雑誌と世論の関係を早くも理論的に分析していた」<sup>lv</sup>ことを明らかにしたという点で評価されている。自分自身は「理論的」な分析が得意ではなかったデスターが新しい世代に期待を寄せている様子が窺われる。

### 終わりに——今回の反省点と今後の展望

本稿では、1920年代のドイツ新聞学におけるゲレス受容の一例として、カール・デスターによる3本の論文を取り上げた。最後に今回の調査の反省点と、今後の展望について述べておきたい。

まず心残りなのは、必要と判断しながら扱えなかった論文が複数点あるという点である。本論でも述べたように、デスターは1926年に、その後に新聞学会の機関誌となる『新聞学』を創刊したが、その第1巻第1号には巻頭論文として彼の論文「ヨーゼフ・ゲレスと新聞学——150回目の誕生日に寄せて (1926年1月25日)」が掲載された。<sup>lv</sup>これは表題からして本研究にとって必読の論文であるはずだが、本稿執筆時には入手できておらず、取り上げることができなかった。また、前書きでも触れたデスターの以外の新聞学者たち、とりわけH・A・ミュンスターとW・シュパエルによるゲレス論文は重要な題材になると思われるが、時間的都合により割愛することとなった。

特にミュンスターは、「新聞学」とその後の「公示学」という区分、詳しく言えば「歴史研究や文芸研究が中心の「新聞学」に対して、調査や統計を重視する「公示学」」<sup>lvi</sup>という区分に際して、新たな方向性としての「公示学」の側に属しており、その点で旧世代のデスターとの恰好の比較対象となるはずである。このミュンスターについて佐藤卓己は、「人文学的な新聞学に満足せず保守的な学会主流派の圧力をはねのけ、実証的な受け手調査を試み、映画や放送の研究に着手し、ドイツ新聞学に経験主義的な問題設定と方法論を導入しようとした政治公示学の旗手」として評価しているが、<sup>lvii</sup>そうした彼と、それ以前のまさに「人文学的な新聞学」を代表するデスターがゲレス選集の編集という仕事を共有し、同じ媒体にゲレスとジャーナリズムに関する論文を寄せたことは大変興味深い。<sup>lviii</sup>彼らの研究上の立場やその方法、あるいはそもそものゲレス理解においていかなる差異があるのかは、ドイツ新聞学におけるゲレス受容の全貌を把握するために最重要のテーマの一つとなるだろう。もっとも、これについては別稿に譲る他ない。

<sup>i</sup> 令和 4 年 3 月 31 日まで福岡大学人文学部講師。令和 4 年 4 月 1 日より京都大学大学院人間・環境学研究科准教授。

<sup>ii</sup> 世論に関する当時の著作として筆者がここで念頭に置いているのは、フェルディナント・テニエス『世論批判』（1922）やウォルター・リップマン『世論』（1922）、『幻の公衆』（1925）といった世論批判のテキスト群である。これらの成立の背景には、フランスにおけるギュスターヴ・ル・ボン『群集心理』（1895）やガブリエル・タルド『世論と群衆』（1901）があった。その後の展開として、リップマンに対する批判的応答として出されたジョン・デューイ『公衆とその諸問題』（1927）や、さらにはオルテガ・イ・ガセット『大衆の反逆』（1929）に代表される大衆社会論も視野に入れることができるだろう。

<sup>iii</sup> 佐藤卓己『ファシストの公共性——総力戦体制のメディア学』岩波書店、2018年の、特に第 2 章「ドイツ新聞学——ナチズムの政策科学」および第 3 章「世論調査と PR——民主的学知の“ナチ遺産”」を参照。

<sup>iv</sup> 同上、71頁以下を参照。

<sup>v</sup> 学説史においてコミュニケーション学の「ナチ遺産」に対する沈黙を破ったのは、2001年に公示学＝コミュニケーション学の公式機関誌『AVISO』に掲載されたドルトムント大学教授ホルスト・ベッカーの論文「協力、継続、沈黙——ドイツにおけるコミュニケーション学のナチ遺産について」であるとされる。同年 5 月には、ミュンスターで開催された同学会の年次大会においてパネル討議「過ぎ去らない過去」がおこなわれた。2002年 1 月にもドルトムントでシンポジウム「新聞学から公示学へ——連続と変革」が開催されており、この頃からコミュニケーション学の過去を忘却するのではなく、精査し討議しようとする動きが活発になったことが確認される。同上、115頁以下を参照。

<sup>vi</sup> Meyen, Michael/Wiedemann, Thomas (Hrsg.): Biografisches Lexikon der Kommunikationswissenschaft. Köln 2013. この事典はオンライン公開されており、本稿の執筆にあたってはそれを利用した (<http://blexkom.halemverlag.de/>)。以下、新聞学の概要について、Vgl. Pürer, Heinz: Zur Fachgeschichte der Kommunikationswissenschaft in Deutschland. Ein Streifzug von den Anfängen bis zur Gegenwart (<http://blexkom.halemverlag.de/kommunikationswissenschaft-in-deutschland/>)。

<sup>vii</sup> 佐藤、前掲書、77頁を参照。

<sup>viii</sup> デスターの伝記的事実については、Vgl. Klausning, Ingrid: Karl d'Ester. In: Biografisches Lexikon der Kommunikationswissenschaft (<http://blexkom.halemverlag.de/karl-deste/>)。

<sup>ix</sup> Spahn, Martin: Görres, der Publizist und Politiker. In: Hochland 1909/10. Hochland はミュンヘンで発行されたカトリック系の雑誌。なお、シュパーン はナチ党と関わりの深い人物でもある。

<sup>x</sup> Spael, Wilhelm: Publizistik und Journalistik und ihre Erscheinungsformen bei Joseph Görres (1798-1814). Ein Beitrag zur Methode der publizistischen Wissenschaft. Köln 1928の表紙および扉を参照。

<sup>xi</sup> 佐藤、前掲書、79頁を参照。

<sup>xii</sup> 同上、68頁を参照。

<sup>xiii</sup> もっとも、これは当時の新聞学のみならず、現代のコミュニケーション学にも当てはまる問題でもある。ペーター・グロツの 1990年の論文「新聞学から公示学、そしてコミュニケーション学へ」は、「専門家と研究所の数に関してはこれまで以上に拡大し」「学者世界における評判も良くなり、業績つまり研究結果は多くの場合、問題なく自明のものとして利用されている」はずの現代のコミュニケーション学においてもなお、「今でも自己理解を巡る論争が時々不意に生じる」ことを指摘している。佐藤、前掲書、70頁を参照。

<sup>xiv</sup> 佐藤、78頁を参照。

<sup>xv</sup> これに関して佐藤卓己は「歴史研究や文芸研究が中心の「新聞学」に対して、調査や統計を重視する「公示学」という区分を採用している。佐藤、82頁以下を参照。

<sup>xvi</sup> Vgl. Klausning, a. a. O.

<sup>xvii</sup> Meyen, Michael: Promovieren bei Karl d'Ester. In: Biografi-

sches Lexikon der Kommunikationswissenschaft (<http://blexkom.halemverlag.de/promovieren/>).

<sup>xviii</sup> Ebd.

<sup>xix</sup> Vgl. Fink-Lang, Monika: Joseph Görres. Die Biographie. Paderborn 2013, S. 361-378.

<sup>xx</sup> Hoeber, Karl (Hrsg.): Görres-Festschrift. Aufsätze und Abhandlungen zum 150. Geburtstag von Joseph Görres. II. Auflage. Köln 1926; Görres-Beiträge. Festgabe zur Jubiläumstagung der Görres-Gesellschaft. Koblenz 11. bis 16. September. Koblenz 1926; Buchner, Max (Hrsg.): Joseph von Görres in Vergangenheit und Gegenwart. Beiträge zum Görres-Jubiläum. München 1927.

<sup>xxi</sup> Vgl.: Joseph Görres, Gesammelte Schriften. Herausgegeben im Auftrag der Görres-Gesellschaft von Wilhelm Schellberg, Adolf Dyroff, Leo Just, fortgeführt von Heribert Raab. Ergänzungsband 2. Görres-Biographie. Verzeichnis der Schriften von und über Johann Joseph Görres (1776-1848) und Görres-Ikonographie. Bearbeitet von Albert Portmann-Tinguely. Paderborn/München/Wien/Zürich 1993, S. 187-193.

<sup>xxii</sup> Joseph Görres, Gesammelte Schriften. Bd. 1: Politische Schriften der Frühzeit (1795-1800). Hrsg. von Braubach, Max. Köln 1928.

<sup>xxiii</sup> Joseph Görres, Gesammelte Schriften. Bd. 6-8: Rheinischer Merkur, 1. Band (1814). Hrsg. von d'Ester, Karl/Münster, Hans A./Schellberg, Wilhelm/Wentzke, Paul. Köln 1928; Joseph Görres, Gesammelte Schriften. Bd. 9-11: Rheinischer Merkur, 2. Band (1815/16). Hrsg. von d'Ester, Karl/Münster, Hans A./Schellberg, Wilhelm/Wentzke, Paul. Köln 1928.

<sup>xxiv</sup> 佐藤、前掲書、81頁以下を参照。

<sup>xxv</sup> 同上、81頁。

<sup>xxvi</sup> d'Ester, Karl: Görres' journalistische Sendung. In: Hoeber (Hrsg.): Görres-Festschrift.

<sup>xxvii</sup> このメディア技術の発達に関しては、新聞雑誌という活字メディアの他、ラジオについても言及されている。Ebd., S. 98.

<sup>xxviii</sup> Ebd., S. 99.

<sup>xxix</sup> Ebd.

<sup>xxx</sup> Ebd., S. 101.

<sup>xxxi</sup> Ebd., S. 113.

<sup>xxxii</sup> Ebd., S. 110.

<sup>xxxiii</sup> Ebd., S. 110f.

<sup>xxxiv</sup> Ebd., S. 111.

<sup>xxxv</sup> Ebd.

<sup>xxxvi</sup> Ebd., S. 102.

<sup>xxxvii</sup> Vgl. Ebd., S. 108f.

<sup>xxxviii</sup> Vgl. Ebd., S. 107f. デスターはここで『ライニッシャー・メルクーア』を「ドイツ初の大規模な日刊新聞」であり、「初めて外国がドイツの新聞雑誌に真剣に注目した」例として評価しつつ、その影響力の大きさをゆえにそれに対する出版界の反発も強かったことを伝えている。例えばバイエルンでは、『ライニッシャー・メルクーア』に対抗し、当地の右派を擁護することを目的とした雑誌『アレマニア』が創刊された。

<sup>xxxix</sup> Ebd., S. 112.

<sup>xl</sup> d'Ester, Karl: J. Görres als Journalist. In: Görres-Beiträge. なお、ここでのデスターの肩書は「ミュンヘン大学新聞学教授」である。

<sup>xli</sup> Ebd., S. 43.

<sup>xlii</sup> Ebd., S. 53.

<sup>xliiii</sup> Ebd., S. 54.

<sup>xliiii</sup> Ebd., S. 45.

<sup>xliiii</sup> Ebd.

<sup>xliiii</sup> 例えば以下のものを参照。Scherrer, Rudolf: Die Begrenzung der Preßfreiheit durch das Strafrecht, dargestellt auf Grund der staatsrechtlichen Rechtsprechung des schweizerischen Bundesgerichtes. Zürich 1929; Weber, Hellmuth: Pressfreiheit und Pressenrecht. Leipzig 1932; Dittmar, Albrecht: Die Beschränkungen der Preßfreiheit durch die Notverordnungen des Reichspräsidenten

ten. Langendreer 1933. なお、このうち Scherrer および Dittmar の著作は博士學位論文をもとにしたものである。

<sup>xlvii</sup> d'Ester, Karl: Görres und die Journalistik. Gedanken zur Grundsteinlegung des ersten Journalistendenkmals in Deutschland. In: Buchner (Hrsg.): Joseph von Görres in Vergangenheit und Gegenwart. なお、ここでのデスターの肩書は「ミュンヘン大学教授」とされるのみで、「新聞学」等の専門分野に関する表記はない。

<sup>xlviii</sup> Ebd., S. 23.

<sup>xlix</sup> Ebd., S. 25.

<sup>i</sup> Ebd.

<sup>ii</sup> Ebd.

<sup>iii</sup> Ebd., S. 26f.

<sup>iiii</sup> Ebd., S. 30.

<sup>lv</sup> Ebd., S. 23.

<sup>lv</sup> d'Ester, Karl: Joseph Görres und die Zeitungswissenschaft. Zu

einem 150. Geburtstag (25. Januar 1926). In: Zeitungswissenschaft. Monatsschrift für internationale Zeitungsforschung. Herausgegeben von Universitäts-Professor Dr. Karl d'Ester, Direktor des Instituts für Zeitungsforschung an der Universität München und Dr. Walther Heide, Hannover. 1. Jahrgang, Nummer 1, Berlin 1926. 当雑誌におけるデスターの肩書は、編者紹介においては「新聞研究 (Zeitungsforschung)」の研究所長と表記されているのに対し、掲載論文の表題下では「ミュンヘン大学新聞学部教授」となっている。

<sup>lvi</sup> 佐藤、前掲書、82頁以下を参照。

<sup>lvii</sup> 同上、131頁。

<sup>lviii</sup> デスターが創刊した『新聞学』第1巻第1号には、ミュンスターもまたゲレスに関する論文「世論に関するゲレスの見解」を掲載している。Münster, Hans A.: Görres' Ansichten über die öffentliche Meinung. In: Zeitungswissenschaft. 1. Jahrgang, Nummer 1, Berlin 1926.